

# 朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解 (九)

— 駁逆の明治維新—反・エンゲルス

「ドイツ農民戦争」論、一向一揆、年貢半減策

北 島 平 一 郎

## 第一章 ドイツ農民戦争の激動期

ザルツブルクと「キリストの兄弟愛」(Christian Brotherhood)  
オーストリア西部とハンス・シユレーラー (Hans Müller)  
ザベルン、インスタット

## 第二章 トーマス・ミュンツァー (Thomas Münzer) の農民戦争

トーマス・ミュンツァーの思想と行動  
トーマス・ミュンツァーとプヘイファー (Heinrich Pfeiffer)  
ミュンツァー軍の崩壊  
トーマス・ミュンツァーの最后  
プヘイファーの最后

## 第三章 ドイツ農民戦争の敗勢

フランケンハウゼン、ミユールハウゼン  
ルッター (Martin Luther) と農民戦争  
南独の敗走

## 説論

## 第四章 ドイツ農民戦争の潰滅

フロリアンゲイアー (Florian Geyer) のたたかい

ドイツ農民戦争と東欧軍

一五二五年の争闘

## 第五章 オーストリア・アルプスの灼熱光

外人部隊

ドイツ農民戦争最后の一戦、ミカエル・ゲイズミイル (Michael Gaismyr)

## 第六章 むすび

ルッターの宗教改革とドイツ農民戦争

エンゲルスの「ドイツ農民戦争」論に於ける戦畧、戦術論

ドイツ農民戦争の残虐性

ドイツ農民戦争の史的意義

ドイツ農民戦争の共和思想、共産思想

## 第一章 ドイツ農民戦争の激動期

## ザルツブルクとキリストの兄弟愛 (Christian Brotherhood)

ドイツ農民戦争の状況についてはその(1)、(2)、(3)を中心に概要をのべたが、その特長は、(イ)ドイツ農民戦争の

背景は、勿論ルッターの宗教改革に触発された宗教戦争で、その闘争の綱領も聖書に基いたそれらであったこと。また彼等の主たる襲撃目標は宗教施設、教会、聖堂、修道院等であったこと。それらは旧派宗教の腐敗墮落の攻撃を名分としていたこと。(ロ)中には宗教の綱領と関係のない要求もかかげられたが、それらは、全く当時急進的なブルジョア民主主義的要求と共産主義的要求のそれらで、ドイツ農民戦争の性格の一端を如実にあらはしていたと言えること、(ハ)農民戦争はもとより農民の政府による苛斂誅求への反発の爆発したものであったこと。(ニ)農民は各地の宗教施設を襲ったとき、常に畧奪をくりかえし、収蔵庫から重要物件を盗み出して破壊し、またワインを持ち出して泥酔したこと等であった。

ドイツ農民戦争は、その後も一五二五年夏の挫折にいたるまでドイツ南部、オーストリアに猖獗する。オーストリア南部ではチロル、ザルツブルクの農民戦争が前年から蜂起していたが、ルッターの改革をみてこれらが新しい力をふるう。ザルツブルクの教会領では大司教マッサウ・ラング (Matthaus Lang) が暴逆的支配を行っていたが、ルッター派を悪魔の異端と呼び、抑圧を加えた。それと共に都市評議会、ブルジョア階級をも改革勢力として処刑をもふくむ弾圧を行った。これが農民軍を含んだ彼へのたたかいとなる。

チロルでは、ザルツブルク市の大公フェルディナンド (Ferdinand) が滞在先のインスブルックから手勢を引つれて帰還し、市民達を弾圧、その無条件降伏をかちとつた。しかし全叛乱民のたたかいは激しく、これが全司教領の彼等の大同団結を導くという方向をとる。そして既製の伝道師の追及が要求され、彼等の選挙による選出が主張された。ガスタインでは「十四条」要求が提出され、福音書のナマの説示が求められ、結婚税 (merchet)、死亡税、ミニ十分一税 (small tithe) 等その他多くの同様の税の廃止が強く要求された。興味があるのは、犯罪人処刑の費用は農

村の負擔となるべきで無い、という主張がもりこまれたことであつた。

叛乱民の団結への勢いは強く、たたかいは広がり、マツサウは彼等に捕らえらるるまでになる。しかし捕らえられた彼はうまく人々を言いくるめて逃亡してしまふ。この為、その逃亡に対する責任者の怠慢があげつらはれ、彼等は軍にリンチされた。叛乱隊の団結の為「キリストの兄弟愛」が形成された。彼等の勢力は日に強く、スチリア、カリシヤ、上部オーストリアにその勢力はのび、「キリストの兄弟愛」は全オーストリアにつくられる程であつた。オーストリア大公フェルジナンドは、この中叛乱農民は処罰されるべし、として叛乱鎮圧に向つたが成功せず、負傷した。まさに危うかつたが自由軍二中隊と三百の騎馬隊の援軍を得て彼は命からがら脱出した。当時はかく農民戦争の勢いは強かつた。マツサウ・ラングはこれら情勢からいまは叛乱派に同情を表しているザルツブルク市と交渉して身の安全をはからおうとした。このとき彼等の間を仲介するという市職員のハンス・ゴールドという人間があらはれたが、この騎乗してあらはれた彼を職務上の不公平を蒙つたとして恨んでいた一肉屋が、馬から引きずり下ろした。これがきっかけとなつた。つめかけていた人々や農民達はマツサウの部隊に殺到し、瞬時に暴動となつた。情勢はいずれも加熱していた。これを見た、近くまできていた農民軍は聖霊降臨日の翌日、街に乱入した。この結果、大司教邸はふみあらされ、特許状、様々の文書、登録証等が持ち出されて破棄され、尚騒動が広がつた。このときこれをしづめる為の援軍が鉾山地帯から到着したが、農民達はたたかに自由と独立の要求を達成した。チロルでも暴動が発生したが、ここでは断罪された叛乱民を人々が裁判官からうばいかえした。聖霊降臨日に、山獄部から農民があふれ出し、彼等は一旦は、要求はインスブルックの領主に提出するとしたが、その夜にブリックゼンで暴動を起し、司教邸、僧侶、教会正典、礼拝堂牧師等を襲ひ畧奪した。こうした一連の襲撃は、これらのみただけでも時の農民戦争が、宗教

改革の強い影響下に生起している事がわかる。暴動はまことに眼をおおうものがあつた、というが農民達はこの期、狩猟の自由や鉱山地区に於ける最初の賃銀支払制度等を獲得し、新宗教教義への帰依はチロル地方で広く行はれた。しかし折角の獲得賃銀の支払いはどこも勝ちで、その額は四千グルデンにも上つたという。また法曹家による新しい権利の宣言は、異教的だと攻撃された。

このとき、鉱山地区や農村地帯のミュンツァー派の人々、その同調者が一つに相集まり一つの要求をかかげた。これは一九〇九條の内容を有したが、その主要なそれらは次の如くであつた。

(1)福音書伝導の権利、(2)武装集団の絶えざる行事、外国軍隊の国境集落への宿泊に対する抗議、(3)トリエント・ワインの自由輸出反対、(4)領主達の耕作地騎乗への、新法曹家達への、裁判所判事、職員のワイン・ルーム保持等への反対、(5)中でも特長的なのは大財閥でメジチ家とならぶフッガー家 (Fugger family) への抗議であつたが、これと並んで特権商人会社が商品の価格つり上げを操作しているとしての糾弾などがあつた。(例えば一八九〇年イッサー(銅貨)が一グルデン(金貨)になつた等)、(6)更にある大砲と弾薬を撤去しようとする当局の試みがあつたが、これは農民側が阻止した。

騒擾はチロル、ブリクゼン、ガルダ湖、トリエント等南部に依然猖獗し、四万を越す人々が蟄集してゐた。このとき一支隊の選定指揮者ゲイズマイル (Gaismayr) が中核戦闘部隊の中心部を構成し、彼の下でこれら地方の各々が統合の動きをみせた。彼は究極の農民戦争目標を「キリスト者の共和国」建設に置いていたが、この発想は、ある方面で、ここにとりあげている一向一揆の「百姓の持ちたる国」構想と似かよつたものを有していた。甚だ興味ある現象と言はねばならない。地方議会 (Landtag) の開催が待望されていたが、人々の領主大公 (archduke) への思いやり

の感情には微妙なものがあり、大公のわが土地への親譲りとしての感情も強いものがあつてこれら感情のからみ合いは複雑なものがあった。ゲイズメイルはこのとき自己発想の一つの地方議会の開催を働きかける。これはインスブルックで開催されたが、叛乱はオーストリア全土に広がる様想をみせており大公の思惑はこれらの前に影がうすく、ゲイズメイルの発想になると称される一〇六條の條文が示され、大公の思いを越えてこれがこの地方の新基本法（憲法）と決定された。これらには当然強い民主主義的思潮がみなぎっていた。

#### オーストリア西部とハンス・ミュラー

ここで我々は一旦オーストリア西部に於ける農民戦争に眼を向けなければならない。ハンス・ミュラーの「黒い森」分遣隊は五月、他の分遣隊と結合するべく西方に進撃を開始した。アルガス、レーニツシュ地方とこれと歴史的にも地理的にも隣接するマルグラベート地域がその範囲である。この目標はフライブルクの攻撃であつた。ここは南西ドイツの重要據点であつた。先年からの騒擾で貴族、牧師達は安全の為にここへあつまつてい、その中にレッテルン城主マルグラフ・エルンスト (Margraf Ernst) と彼の家族も交つていた。このときフライブルクは特権階級の集合地の様になつていた。この地方の分遣隊指揮者はハンス・ハンメルシュタイン (Hans Hammerstein) で、マルグラフの居域はレッテルンにあつた。彼等は交渉に入つたが、マルグラフは「二ヶ條への署名と皇帝の代理人と財務監理人としての役務から離れること」を條件として要求された。これが認められればレッテルン城は安全が保障される、と。これに対しマルグラフはまだ情勢を樂觀しており、これに明確な答えを与へなかつた。マルグラフの拒否、これが合図となつた。騒擾は一挙に攻撃へ転じた。瞬時にレッテルン城を含む諸城が農民軍の為に占領された。攻撃

はフライブルクに移った。該地ではあらゆる防備が点検され、一二のギルドが一二の防衛地区を守ることとなり、大学の学生四十人もが、学長と二人の教授の指揮の下に防衛に参加した。例の如くここでも交渉が行われた。ハンスマニューラーとブレイスゴウの「黒い森」分遣隊に対し市当局がその意見を徴した。ハンスの答えは、彼等がフライブルク抑圧者の側にたったことは残念の極みであり、速かに「福音の兄弟愛」(Evangelical Brotherhood)に参加するよう要請するものであった。当局はこれに対し、オーストリア家への誓言を有する為、その要求は応じられない、しかし調停は可能であり、ブレイスゴウの農民達の不平と要求は聴取される上、彼等がブレイスゴウの近辺から撤退すれば平和が直ちに回復される、と応答された。市当局は市の防衛に依然自信を有しており、ツエンネンバッツハの修道院が簡単にふみ破られて三万グルデンに及ぶ被害を受け、ケンジンゲンが占領されて分遣隊がそこに駐屯することになった痛手は無視された。

しかし情勢の悪化は当局の思惑をはるかに越えていた。攻市軍は市への水道をたつた。市は攻防戦には本来無縁で、防衛にはもとより不向きである。戦火が市中に及ぶということで富裕階級はこのときに及んで戦意を全く喪失した。多くの貧しい人々は攻市軍と気脈を通じ、こうしてフライブルク攻防戦は市当局の頭越しに、市包囲網結成から一週間を決着がついた。市は降伏し、「福音の兄弟愛」に参加を決めた。平民の重課はとりのぞかれること、「福音書の眞の原理」が確立されることが宣言され、すべての人々が相互に平和に暮らすことがうたはれた。しかし市と封建君主との関係はきびしくいましめられ、三千グルデン以上の金額が、集まった分遣隊たちに支払はれた。フライブルク市は農民軍に四個の軽砲を手交したが、これにつきオーストリア政府に弁明がなされ、これはラインのリンブルクで外人傭兵の侵入を防ぐ為であり、如何なる他の人々にであれ、危険がせまつたときにはこの大砲は破壊されるべしと

いう戒律を下してある、と。こうしてフライブルク攻防戦は終った。

### ザベルンとノイスタット

しかし戦争はまだ農民軍によって続けられていた。フライブルクと共に、反乱はエルザッスとザベルンに生起していた。エルザッスでは二万人の農民達がその城門にせまった。市は占領され、例の如く宗教施設が襲はれ、近辺の街々、村々が襲撃の対象となった。ストラスブルクでは僧侶と尼僧達が修道院と女性修道院から追い出されてしまった。騒擾は、ザベルンに移った。農民軍は、エラスムス・ゲルバー (Erasmus Gerber) なる人物に指揮され、ボーージュ山の突出部にそってザベルンを目指した。ザベルンはストラスブルクの司教駐在地であった。近辺のマウエルスミュンスター大聖堂が道に襲はれた。略奪は常の如く行はれた。ザベルンはレーンの大公に援助を依頼した。しかし市民が、包囲軍に門を開き、ザベルンは陥落、五月十三日に農民軍はそこに入城した。この期、叛乱は、この他そこここに生起していた。曰くコルマー、ランダウ、ノイスタット、ロウエンベルク、ウオルムス、ウエストホーフエン等、これらは直接間接農民軍の襲撃の目標とされた。その攻防の展開略奪のそれは従来の農民戦争のそれらとほぼ同様であった。

ノイスタットの様相は少し従来の農民戦争のそれと異なつた。ここでは選挙候ルドビッヒ (Elector Ludwig) 自身と農民軍指導者の間の直接談合がアレنجされた。ここで戦争処理の大綱が話し合はれることとなつた。候は三十人の騎馬武者を引つれていた。交渉が始まると農民軍が全軍、近辺の丘の上にはらはれた。ものものしいそして危険な雰囲気が一瞬ノイスタットにみなぎつた。交渉は長びいた。そこから出てきたものは次の如くであつた。



① 街、城、村落にして農民軍に占拠されたものは夫々の合法的領主とマスター達に返還されるべし。以後敵対行動はやめられる。八千名と算定される農民兵は部隊を解散し、夫々の家庭に帰るべし。

② ルドビツヒは彼等に恩赦を与へる。

③ 早い機会に州（地方）議会が開催され農民達の不平不満は熟慮され、いやされる。

選挙候自身が農民達と話し合い、飲み、且食った。これで一つの大きな転機をむかえた様にみえた。

州議会は聖霊降誕祭からの三日間 (Whitsuntide) に開かれた。その決定はライン河の兩岸全州に遵守されることごとうたはれた。この選挙候の寧ろ穩健な行動は決定を有効ならしめることが期待された。しかしそれは完全には守られず、パラチネイトの農民隊は依然略奪と破壊の行動をやめなかった。こういった騷擾は、トルヒセスやスワビアン連盟の軍事力がこれを一掃するまで続けられた。

## 第二章 トーマス・ミュンツァーの農民戦争

### トーマス・ミュンツァーの思想と行動

ここで我々は農民戦争最大の指導者と目されるトーマス・ミュンツァーの出現を迎える。トーマス・ミュンツァーがこの時期ドイツ中南部に行った遊説活動は農民戦争に甚大な影響を及ぼしたことは言うまでもなく種々の意見や諸説がこれに加えられて、もつとも、反対のそれらもなきにしもあらず (Melancthon; Historie Thoma Munzter, Michael Gaismirt. Ausgetruckte emplossung des falschen Glaubens der Ungetrewen Welt. Emphatic Exposure of the False Belief of the

Faisless World)であるが、この期最大の農民蜂起が彼に導かれて起つたことは否定し得べくもない。T. ミュンツァーは神学の徒であつた。彼の言説の中で、そのときどきに表明せられた思想は、諸侯、貴族、高位聖職者 (bishop, archbishop) 等の悪しき支配と暴逆への反抗、平民のそれらへの反逆の権利、叛乱の支持等であつたが、これらをその時々々の演説の中で熱烈な感動的な言葉で行つた。これらは勿論体系的な思想として発表されたものではないが、その中で彼の表明した千年統治(キリストが最後の審判の下る前千年間この世界を治めるといふ思想)に基いたキリスト教国 (Christian Commonwealth) の建設は最もはなばなしい宗教改革に基いた考えのそれであつたと言はねばならない。ここに我々はドイツ農民戦争の宗教改革に基いたキリスト者の正義の叫びをきく。即ちこの思想は、幼児洗礼 (infant baptism)、自覚のない幼児に洗礼を施すこと。これに反対の主張もある(バプテスト教会)。また成人後の洗礼確認の実行もある)、聖餐式 (Eucharist) 等神学的トピック尊重の彼の思想と主張の上でこれらが、アルスタットのミサで、ダニエル書 (The Book of Daniel 旧約聖書)、一九世紀教会聖歌 (The Nineteenth Psalms) の註釈の中等で主張せられた。ドイツ農民戦争の思想はまさにこれで、キリスト教説への信仰が運動の主潮の中に渦まいていた。これは、旧派キリスト教がいやしがたい程迄に腐敗墮落していたといふ彼等の主張が勿論その背景にある。この旧派キリスト教への失望が、全農民、全庶民の心に宿つていたのである。

何事によれ組織が年数と共に新らしき、強さを失いほこりがつみ重なるのは、如何なる建造物もその運命をまぬがれない。これは教説や話し合ひではいやしがたい。建造物が腐朽すればこれを建て替へる必要が起つてくる。体制や組織がそうなつた場合もこれと全く選ぶところはないのである。ここに改変、改革、はては革命の必要が起つてくる。これが天が生き活動するすべての物体に課した運命であり、これをまぬがれることはそれらに不可能である。人類の

歴史もこの原理に従って動いてきた。国家が腐敗墮落しながら革命を抑圧しこれを封じこめた場合は多くの例が示す様に革命に向う人々の勢いが戦争に向けられてしまう。これは恐ろしいことであるが、それも歴史の必然として起った。従つて人類の歴史は太古から革命と戦争のそれとして何千年、何万年続いてきたのである。この事実到我々は眼をそむけることは出来ない。情けなく、悲惨なことである。しかし果たして何時の日か、体制の権力者や、受益者が、一日、すべての権力と利益を自ら放擲し、新らしいそれらに道をゆずる日がまこと、この世界に訪れるのであろうか。それが無い限り、従来の歴史は繰り返されねばならない。

これから逃れようとして人類は様々のイメージを描いてきた。千年統治しかり、ダンテの樂園しかり、極楽世界しかり、桃源郷しかり、共産主義イデオロギーしかり、そしてここに出たT. ミュンツァーのキリスト教国またしかりである。これが、一向一揆の理想国「百姓の持ちたる国」と相牽連することは疑いを入れないのではないか。一向一揆とドイツ農民戦争、「百姓の持ちたる国」と「キリスト教国」の相似性はまことに興味深い。これに対し、共産主義はマルクス以後、純粹社会科学的共産主義をと見え、共産主義の成就が夢想ではなく、それは現実的必然的に生起し、実現すると主張する。ここを以て先述の人類の諸イデオロギーは古えの語り草となつてしまふと説く。即ち各種企業間のカルテル、トラスト、シンジケート（またコンソーチアム consortium コングロマリット conglomerate）が独占の段階に進み、企業間の併合、合併が結果する。これが尚進捗して、各種企業が全企業の合同、合併を果す（平成の世界企業、銀行等の合同併合運動）。この段階でそれは各企業の利害が一つになり、これは全国民の所有に転化せざるを得ない。即ち共産主義国家の出現である、と説く。この必然の社会経済法則を解明するのが純粹社会科学的共産主義であるといふのである。

スターリンのソビエト連邦は共産主義を標榜したが、集団農場と強制労働で生じさせた余剰価値をすべてといていい程重軍備にそそぎこんだ。その結果史上最高最大の重武装が出現し、これがヒトラーとの兄弟殺 (fratricide) ブルジンスキー Z. Brzinski の表現) を戦うこととなり、スターリンはこれに勝利を収めた。しかし共産主義理論のイメージする豊富さは、民生の極端な圧迫でけしとんでしまった。これにつき、この重軍備なり、何かに余剰価値をきりさかない限り、集団労働で効果的な余剰価値が生じ、これが民生に活かされるか、は今後の問題となろう。

しかしこうした企業の全体系的合併の生じる問題は矢張り、これを基盤とする資本主義なり経済体制の貧しさのそれで、各種資源が勿論豊富で、このためこれを利用する労働力が自らここに謂集するといった資本主義なりの経済体制では、個々の企業、大企業がそれなりの充足的発展を継続し得るので、こういった純粹社会科学の共産主義理論はあてはまらない。

とまれこうしてみる限り、「キリスト教国」と「百姓の持ちたる国」思想は民衆の楽土建設のイデオロギーに属するものと言はなければならない。そこにはもとより、これらの国が運動法則として結集する、という純粹社会科学の共産主義論は無い。しかし共産主義社会もレーニンの前衛的武力支援がなければ実現しない如く、このイメージも実現の方途として「ドイツ農民戦争」があり、「一向一揆」の戦いがあったのだと説明しなければならぬであろう。

### トーマス・ミュンツァーとプハイファー

T. ミュンツァーは一五世紀の終りに生れ、教師となり、また説教者となった。最初はルッターの徒としてあらはれたが、ルッターの教説は旧派協会の温存の面と改革の面が一貫していないとして、教会と国家の革命的変革を求め

る様になった。その背景には彼の父がストルベルク伯の手によって叛逆のとがで絞首刑にされた事実があった。彼は神秘主義に傾倒する様になり、ドイツ、イタリアの神秘主義に強い影響を受けた (M. Eck, J. Trauer, J. Florus)。これはツビツコウの仕立て職のマスターであったニコラス・ストルヒ (Nicholas Storch) と接触する様になって、キリストの千年統治 (millennium) 待望論となった。間もなく仕立て職の街ツビツコウは千年統治一色となり、これは各地に波及する勢いをみせ、ルッターさえも彼等は神の使徒ではないかと疑った、という。しかし街の評議会は彼等の弾圧に乗り出し、この結果、人々はミュンツァーを含めてウイツランベルク、ボヘミア等へ逃れた。彼はフスの如く新しき歌を奏でる、とし、旧僧侶階級と聖書の死語を攻撃して神に選ばれた人々のインスピレーションに聞け、と訴えた。彼の説教は特にチューリンジアのアルスタットで大きな反響を呼んだ。これを聴聞にくる人々は追々にふえ、果てはくびすを接して群集した。ミュンツァーはサクソニイの選挙候フリードリッヒ (Elector Friedrich) やヨーハン大公 (Duke Johann) にも説教の手紙を書いたが、何の反応もなくここを境として、彼は秘密結社の結成に踏みきった。それは地上の神の王国建設をめざすため、休みなき努力を続けるというものであった。その綱領は次の如くであった。

- (1) 自由と平等が支配する。
- (2) プリンスや大公達は新しき福音になじまない。従って彼等は覆滅されねばならぬ。庶民 (common man) は福音を信奉し、従って彼等は尊重される。
- (3) 神の国の市民とならぬものは追放され、また殺されねばならぬ。
- (4) 内なる光の目覚めをさまたげるものこそは、この世の富である。従って神の国に於ては、私有の富は存在してはならぬ。あらゆるものは共同で所有されねばならない。

この思想が神の国の名に於て私有財産を否定し、共產主義を標榜していることは明らかである。宗教は必ずしも富を否定しない。旧約聖書も祭壇の什器やささげものの金製を諭告している。しかしこの神の国は事物の共有を主張して、富を排斥していることは明らかである。興味ある点である。

この後、ミュンツァーと選挙候補フリードリヒとヨーハン大公、そしてルッターをもまきこんで彼等の間で種々のかけ引が展開される。ミュンツァーは説教とパンフレットの配附をやめようとせず、ヨーハン大公、そして続いてフリードリヒは最后ミュンツァーにその活動の中止を命令するに至るのである。そして選挙候補はアルスタットの市評議会に働きかけ、ミュンツァーの追放を決定したのであった。そこでミュンツァーは直ちに街をはなれた。彼はミュールハウゼンに移ったがそこで彼の同志となるプヘイファーと出会う。プヘイファーはルッターの使徒であったが、その僧服を脱ぎすてて新しい教義に転向し、これを人々に説教しはじめていた。この説教に人々はおおい多数が集まって遂には群衆をなした。ここからここでも市民と市評議会 (Rath) の衝突が結集し、後者はプヘイファーの追放を議決し、前者はプヘイファーの起草にかかる一二ヶ條を含む要求書を評議会に突きつけた。それを要約すると次の如くである。①教会不動産 (土地) の没収、②労役 (corvées 兵役も含む) の廃止、③制定二〇〇年を超えない封建賦課の廃棄、④狩猟、漁労の解禁、⑤刑法典改正、⑥各封建領国の恣意立法の禁止、⑦市評議会員の市民選挙とそのリコール制、⑧門閥系人士の参政禁止及びギルド組成員の評議会選出。

ミュンツァーはミュールハウゼンに合流し、プヘイファーと共闘することとなったが、ここに二人につき従う人々の間に劃然とした分裂が起った。階級的なそれとも言ひ得るものでその現象と影響は大きかった。それは次の如くである。

一、ミュンツァー派。プロレタリアート、純粹革命的で先にふれた地上に神の王国を建設するという理想と運動で「キリスト教国」をうちたてることが究極目標であった。これは中世に於ては明らかな共産主義思想に基づくそれと理解された。

二、プヘイファー派。ギルド組員と、市評議会 (Rath) に反対な市民団とがその中核を構成し、中産階級主体による政体の確立とその目的の為に中世封建主義体制を改革するというもの。ここには共産主義的傾斜はみられない。かく両派根本的なイデオロギーの相異を有し、これが両派の二人の指導者の微妙な摩擦となった。しかし両指導者は、当面これを表面化することはせず協同して革命達成に努力するという姿勢であった。

この情勢の下に彼等は評議会攻撃に移った。評議会ではこの空気の中で市の各門を閉じたが、時すでにおそかった。これは一五二五年二月の事であった。ミュンツァーはデモ行進を率い、評議会の組員と古い家族の死を要求する。情勢は抜きさしならぬところまできていた。翌日、エクソダスが起った。多くの門閥家族と富裕層が市を逃れた。評議会は崩壊し、当然すぐさま新評議会が結成された。この市評議会は「長期評議会」(Eternal Council) と呼ばれた。即ち従来の様にメンバーの四分一を順次さしかえることをやめ、新組員すべてが、国家議会開設まで職勢を行う、というものであった(この記録は農民戦争敗亡の際に破棄されて、詳細は不明となっている)。この新評議会はプヘイファー主導で形成され、市の中産市民層が参画した。ブントシユ어의新らしい展望が開けたとし、農民戦争のピークと考えられた。

ミュンツァーはこの新評議会に参加せず小規模な共産主義的社會を形成する。聖ジョン (St. John) 修道院の基地であったジョンニタホーフから僧侶を追い出し、そこを新教義に則ったそれとしてそこへ移ったのであった。この

とき社会経済的側面は、英国の世俗主義思潮に下級中産階級と上位労働者階級の人々が同調することがあり、彼等は「教会と英国非国教派会堂」を否認しながら実は、英国非国教派運動の教會的儀式を採用してゆくことがあり、経済的社會運動としては、こうした勃興しつつある中産階級がギルドと彼等が激しい闘いをいどんだ封建的支配階級の種々の遺物に實質は依然固く執着しているという事実があった。しかしこうした現実的現在の條件に新しい社會的條件がとつてかはるときに、社会的富の生産と配分は最も進歩した近代資本主義的發展的ラインに副つて遂行されてゆくのであった。この事を我々は洞察の外に置いてはならない。

すべてのものについて新らしきものと古きもの間には争いがくりひろげられる。新らしき動きの中には、メツシナ海峡のスキラの岩礁 (Scylla) (犬のように吠える六頭の女怪物が住んでいる) とチャリブデス (Charjvdis) の深海にまで引きこむ渦巻きがある。(渦巻きをのがれてスキラの岩礁に辿りつくるとこの六頭の女怪物の餌食となる) キリスト教も当初はジュウリイのセクトとして出発し、ユダヤ教 (Judaism) の異端として長く残った。ローマ帝国に於てそれがその全域にひろがると異端は異教主義として前者の教義、礼拝、儀式を全面的に吸収していった。その相克は外面的にこの二つに相異が認められなくなる四世紀迄続いた。即ち一は古き袍衣 (swaddling-clothes) を新らしき基本的な衣裳ととり更えることにあり、他はこの新らしき衣裳から古き袍衣をとり去るという極めて思ひきつた試みの中にみられる。こういった現象はすべての改変の中に出される、宗教的、政治的、知性的、そして経済的。かくして源初キリスト教 (Judaic Christians) は時間のたつにつれて異端 (Ebonite heresy) としてそこから疫除されることとなったのである。異端の側からいうとこれと同様の事はグノーシス主義 (Gnosticism) とモンタノス主義 (Montanism) について起っている。前者は初期キリスト教会に於て一時盛んとなった主義で、知識について靈的直感的認識をとい



て後に異端派とされた。後者は二世紀中頃、小アジアで起つたキリスト教の一派で聖霊の御使いと確信したモンタヌス (Montanus) が説いた。至福千年到来の信仰を主張したもので、苦行と断食をすすめたが、後に異端派とされた。こういった現象である。キリスト教には種々の思想と信仰の形態があり、前稿にみたキャサールのそれは大きな力を持ち、広域に伝播したことが知られる。近代社会主義についてもそこにフェビアン主義 (Fabianism) 改革進歩について斬新主義をとる平和的斬新主義的 (socialism) として知られる国家社会主義的傾向をみる事があり、これは古き官僚主義形式を尊重するが、他方、そこに無政府主義的 (anarchistic) 傾向も強く、これは勿論、すべて現存する行政組織を廃棄することを主張するものである。

ミュンツァーのアイデアは決して新らしいものではないという主張、ある種の修道院生活の中で中世紀、それらの共産主義理論がいろいろあつたということは否定するべきではないし、それは積極面に於てはその教義と行動に関する限り、眞実であると言はれるかもしれぬ。しかし消極面に於てミュンツァーの説いたところは十分に社会的進化の現実的歩みに合致するものであつた。このことは忘れられるべきではなく、その失敗は古き封建的組織の完全破壊を押しとどめ、他のヨーロッパ諸国に比しドイツの進歩が優に三世紀はおくれたという事実を結果した事、また否定するべきではない。この事はミュンツァーの思想と行動の評価に於て当然まことに重大である。この点これを蓮如と一向一揆と「百姓の持ちたる国」理論にあてはめることが出来ることは疑いがないか、いな、「百姓の持ちたる国」理念は、優にこれらを越え、共産主義の理想を高く追求するもので、スターリンの強制労働と集団農場に仮託された共産主義を眼下に睥睨するものであるとさえ言い得る。西暦第二のミレニアムは蓮如の「百姓の持ちたる国」理論に対し、何をもつてこたえようとするのであろうか。平成今日の共産主義、共産党、人民民主主義、再生のおそ

れあるナチズム等は、蓮如の「百姓の持ちたる国」理論を尚師表として仰がねばならない面を強くもっているのではなからうか。その理論とそして特にその行動に於て。

ミュンツァーの共産主義は当時、不胎化理論となつたと言はれるが、これは後の世界に封建的、教會的悪しき特権主義に対する反対概念として民主主義理念の中核を構成することとなる。①「内なる光」(inner light)の普遍性に關する彼の主張。伝統に反する個の判定の権利を單純に強調する神秘主義の方法。②外なる權威に対立して個の範囲内に於て個人的権利を主張するそれ。中世後の進歩的運動の理論的礎石となるところの理念。即ち右記を内容とするものであつた。しかし彼の理念はヨハンニエタホーフ以外のところではせいぜいコーンや他の食料、衣料用クロース等の配給という現象に限られた。ミュンツァーの説教は以後またたく間にミュールハウゼンから近隣に広がりにエルフルト、コブルク、ヘッセ大公国、ブルンスウィック等にまでいたつた。今や農民戦争は南独、オーストリアをはるかに越え中部ドイツにまで広がつた慨があつた。青少年男女混声合唱団がつけられ、ミュンツァーが旧約聖書のイスラエルの子達に与へられたはげましと約束の言葉から作詞した聖歌がうたはれた。大聖公会堂都市エルフルトは一時、三千から四千の農民軍に囲まれたこともあつた。しかし満つればかける習いで、ミュンツァーの運動にも早くも暗い陰がさしはじめた。色々のことが言はれるが、「帝国の中の帝国」(imperium in imperio)と言はれたミュンツァー集団が追々熱気を失い、ミュンツァー自身ミュールハウゼンから外に出ず、またブヘイファーとの乖離対立が漸く人々にあきられ、これらが事実上、農民戦争の分裂化に当然道を開いた。こうしてミュンツァー軍団は最后、戦力二、三百名で最終戦を戦つたといわれる状況に陥るのであつた。

ミュンツァー軍団の崩壊

反動はヘッセのランドグラーフ公 (Landgraf of Hesse) とブルンスウィックのジョージ・ヘンリー (George Henry) 公爵の手によって準備され、強力に武装された兵士の戦闘集団が構成された。プハイファーはミュンツァーとの大同団結をはかったが、無防備に等しいフランケンハウゼンに農民兵の主力を駐屯させていたことが最后痛手となった。これは四方を囲まれ、防備された場所を選んでそこに駐留させるべきであった。プハイファーはミュールハウゼンに残り、ミュンツァーの方は五月一二日、フランケンハウゼンの外側にいた農民軍に合流した。例の如く農民軍は交渉をもちかけられ、種々の条件が提出された。しかし実はこれはサクソニイ公の強力に武装された援軍が到着する迄の時間稼ぎにすぎなかった。

農民軍にかく、種々の働きかけがなわれていて、神は彼等の敵をその手に委ねるとか、弾丸は彼等をよけて通るとか説かれたが、ストルベルク伯 (Count Stolberg) や他の貴族から三時間双方が敵対をやめ、解決を交渉によって見出そうという示唆があり、これは具体的な提案として考えらるべきだとされた。しかしこの解決は彼等の降伏が内容であった。農民軍にはストルベルクの様に貴族の同行するものがあつたが、これは大半農民戦争の終結を働きかけるものと考えて大過なかつた。

T. ミュンツァーはフランケンハウゼンの高地へのぼり、来るべき戦いを天下分け目のそれ (Schlachberg) と呼んだ。しかし一方交渉は着々進んでいた。農民軍は一万六千、よく訓練された重武装の隊もあつたが、大半は正規の武器もなく士気も振はなかつた。交渉は農民の全免責が、彼等の指導者の引渡しによって保証されるというところ迄まで。中でもミュンツァーのそれが最緊要事である、というものであつた。同行の貴族はこの条件の受諾をせまつた。

こうして農民戦争は彼等の敗北の中に終局を迎えようとする。三人の貴族、ストルベルクとリクスレーベン (Von Rixleben)、ウエルテルン (Von Weltern) が公子達の陣営に送られた。無條件服従とミュンツァーの引渡しがここで絶対条件とされた。農民軍は動揺した。ミュンツァーをめぐって議論がとびかった。ミュンツァーは依然最強の農民軍の一隊にかこまれていた。農民軍へのスピーチがなされ、そのとき突然あらはれた虹が、農民軍の勝利を神が示されたものだと言張された。ミュンツァー自身は、信仰なき公子達を非難し、少数者がよく大群を征服した聖書のヒーロー達、ギブオン (Gideon) やダビデ (David) 等の物語りをひいて農民軍の士気を高めようとした。

そのとき、何の予告もなしに議論最中の農民軍の中へ大砲が打ちこまれた。農民軍は、これこそ神の啓示で、神助が彼等に下るのではないかと言った。しかし砲撃に続いて貴族軍が農民達に殺到した。こうしてそこは一瞬の内に殺戮と虐殺の巷と変じた。戦闘体制になかった農民軍は討たれ、さし殺され、情容赦もなく斬り倒された。農民兵は四方に逃げ出した。石を武器に少数の者が抵抗したが忽ち蹂躪された。

### トーマス・ミュンツァーの最后

農民兵はフランケンハウゼンに逃げこみ、最后のより所として教会、修道院に彼等の安全を求めたが空しかった。これらは農民兵の入るのを拒んだのであった。殺戮は二、三時間続き、五千名以上の叛乱者が犠牲となった。市中の流れが血で真赤に染まった。捕虜は直ちに引出されて斬首された。市の婦人達が彼女等の夫の命乞いにひれ伏した。叛乱軍の中に一人の説教師とその助手がいた。二人の殺害が夫達の助命条件だといはれた。聖職者の殺害は何人もなし得ない。仏者のそれは七代崇ると云はれる俗言もある。今やしかし婦人達は容赦しない。僧職二人が引き出された。

彼女達は棍棒で二人の頭部を滅多打ちにした。頭は破れ腐ったキャベツの様になり脳漿がながれ出た。棍棒にもそれはまといついた。そして夫達は彼女達に投げかえされた。この惨劇は、彼等が聖職の身をかえりみず、統治者に叛逆した為だと説明された。

トーマス・ミュンツァーは首に懸賞金がかけられ、フランケンハウゼンにまで至り、一軒の廃屋に身をひそめた。衣服をぬぎすて、まぐさ小屋に伏せた。しかし殆ど同時に一人の騎士の従卒がその家に入った。そして彼はたちまちミュンツァーがまぐさの中に伏せているのを発見した。彼は探索者の一人としてやってきたのであった。彼はミュンツァーの顔を知らなかった。ミュンツァーは男に熱病で動けない、と言った。男は略奪の常習からふんふんと言い乍ら、ミュンツァーのナツプザックをかき回した。熱病の人物が何者であるかが瞬時にわかった。従卒は大物の発見に雀躍し、直ちにこれを騎士に報告した。こうしてドイツ農民戦争の一方の大立者、トーマス・ミュンツァーは捕はれた。

彼は公子達の前に引き据えられ、公けの秩序への服属について等を追求された後、彼の政敵エルンスト・フォン・マンسفエルト伯 (Ernst von Mansfeld) の下に送られ、そこで地下牢に幽閉された。ここで彼は後世に疑問を残す書簡をしたためた。これが偽書であるか、如何なる意図をもつてしたためられたのか、当時死を以てこの如き告白をすすめる脅迫が日常的に行はれた、等々がこれにつき喧すしく論じられた。その問題となった手紙の内容は次の如きものであった。①叛逆のこれ以上の試みを非難した。それは望みなきものである。②聖儀式に関する異見、誤謬性、もう想、一般キリスト教教会の典礼に関するそれらについての告白的さんげ、③破門されたカソリック教会 (Holy Christian Church) 会員としてのさんげと自らの行動に対して許しを乞う告白、④彼の妻と子供達の為に彼等を弁護し

保護を求めざるんげ。

農民軍の援軍たるべきチューリンジアのそれら二つの隊は、後に農民軍の一体制の欠如として手ひどく非難されるのだが、フランケンハウゼンから遠くない地点で酒もりに酔いつぶれていたし、プハイファアの軍隊は、自己の防備に心を奪はれて他のこと、また一般的な大局的見地にたたず、たよりにならなかった。こういうことがあつて農民軍の潰滅は避けられない見通しであつた。

### プハイファアの最后

ミュンツァーは幽閉先から公子達のミュールハウゼンの前面にある陣営へ送られた。彼の処刑が準備された。プハイファアは、一千二百の農民軍に保護されていたが、その人望はいまや地に堕ち、市の人々は騒擾を終結する為に、彼の早期の無條件降伏こそが必要であるという意見となつた。こうして彼は遂に市にいたたまれず四百の忠誠を誓う兵士と共にフランコニアの農民軍に結合する為そこを離れた。

これを見て市の婦人一千二百名と五百名のバージンがはだして急遽公子陣にかけつけた。そして彼女等の慈悲を哀願に及んだ。パンとチーズが興へられた。男共はどうした、という詰問で、市の責任ある紳士達が帽子をかぶらず、またはだして公子陣営にかけつけた。彼等は三度ひざまづく礼をとり市の門鍵を差しだした。こうして直ちに公子軍が入城し、それと共に市民の武器が一切没収された。ミュンツァーとプハイファアの「永久評議会」は直ちに旧の「評議会」にとつてかはられた。市長はじめ叛乱協力者が処刑され、市は自由をうばはれ、貢納都市となつた。皆はずべてこぼたれ、武器、貴重財産、馬匹が差し押えられ、その解放に四万グルデンが支払はれた。

プハイファーは公子軍に急迫され、アイゼナツハ近傍で彼等の間に激闘が展開された後九二名の同志と共に最后捕えられ、公子陣営につれ戻された。彼等は直ちに処刑された。プハイファーは、告白とサクラメントを拒否し、恐怖もおののきもみせず懲容として死についた。彼の敵もその態度にうたれた。

ミュンツァーは最後まで逡巡し、おののきをみせた。それは彼のヘルドラングン・レターとつろくすると批判者が評する如くであった。公子達の彼の穴ぐまあぶりだしは意味深長といえた。サクソニイのカソリック大公ジョージ(Catholic Duke George of Saxony)はミュンツァーが彼の命に背いたこと、妻をめとつた事を悔い改めよとせまった。ヘッセの若きルッター派裁判長 (young Lutheran Lavdgraf of Hesse) は、彼はそれらのさんげやくい改めは何等必要はない、しかし彼が人民を叛乱に使喚したことは反省しなければならぬ、と言った。ミュンツァーの返答はこうであった。彼は己れの力を越えて反抗を導いたことは誤りであった。しかし公子達は、すみやかに慈悲を以て彼等を取扱はねばならない。そして聖典 (Holy Scriptures)、特にサミュエルと王達 (Samuel and the Kings) を熟読し、タイラント達の哀れな最后について、その教えを胸にきざみこまねばならない、と。

この後ミュンツァーは執行吏の一撃を待つ態度で一言も発せず、敵によれば、極端な恐怖から、味方によれば通常儀式への彼の軽蔑から、クリードウ (credo 信教ミサ曲) が奏でられても沈黙を守った。最后ミュンツァーは斬首され、その首はプハイファーのそれと共に長い竿の先に梟首され、体は剣で突き刺されて側に磔けられた。

### 第三章 ドイツ農民戦争の敗勢

#### フランケンハウゼン、ミュールハウゼン

フランケンハウゼンの戦い、ミュールハウゼンのそれらが、ドイツ農民戦争の潮流変化のポイントとなった。この敗北でそれは以後衰退から敗滅に向う。農民戦争はみた如くそれまでにドイツに荒れ狂い略奪と荒廃はすさまじく、四六の城砦と修道院が破壊された、と言はれ、その際の残虐なリンチは目をおおうものがあつた。戦争と呼ばれるのであるからそれは止むを得ないのかも知れない。しかしドイツ宗教改革から発したこの闘いが宗教戦争の面を強くふくんでいた事も当然忘れらるべきではない。それについては後にくわしくふれなければならぬが、この農民軍の敗北の後各諸侯や貴族は勢力を回復し、彼等はその各領国、領地で農民軍の残滓払拭に力を振った。例えばエルフルトで旧市評議会が回復されたが、これと関連して農民軍の叛乱と関係した人々や事物について慈悲なき厳酷な取扱いが話題となった。

こうして我々は、この後の農民戦争の様想とその敗滅の歴史に進まなければならない。

#### ルッターと農民戦争

マルチン・ルッターの宗教改革と農民戦争に対する態度は自らその発現を異にしていた。即ち彼の最初の四月半ば頃の文書に於ては彼は次の様にのべていた。「スワビアに於ける農民二ヶ條への平和のすすめ」、ここに於て福音書の自由なる伝道が大いに賞揚され、カソリック僧職が手ひどく攻撃されていた。それはルッターの宗教攻撃がローマ



カソリック教のそれに向けられたもので、それを契機として農民戦争が起ってくる。そして、それも激越極はまるそれが生起する。しかしそれは彼にあつては予想外のこと、その為それをみて彼はおどろきこれにつき農民戦争を激しく非難弾劾する。即ち農民達を粉碎し、しめ殺し、刺し殺せ、という激越な農民戦争撲滅の口吻となるのであつた。エンゲルスはこの事を次の様にのべた。「ルッターのたくましい農民気質は、彼の登場のこの最初の時期にもっとも激烈にぶちまけられた。

彼ら（ローマの坊主ども）の狂気の乱行がこのうえともつづくなら、思うに、それを押えるのには、諸国王と諸侯が暴力をもちいて介入し、武装し、全世界を毒するこの悪人どもを攻撃し、ことばをもつてでなく武器をもつてこの仕業を一挙にかたづけよ、というにまさる勸めもなく棄もまずあるまい。われわれは泥棒を剣で、人殺しを絞首なわで、異端者を火刑で罰するのに、なにゆえかえつて教皇、枢機卿、司教、ローマのソドムの有象無象いつさいのような、有害な墮罪の教師どもを、ありとあらゆる武器をもつて攻撃し、われわれの手を彼らの血で洗わないのか？」（「フリードリヒ・エンゲルス、ドイツ農民戦争」伊藤新一、土屋保男訳）これはルッターが坊主どもを攻撃する言葉にすぎなかつた。しかし農民戦争がルッターの思惑をこえると、その攻撃はこのように激越となるのであつた。彼は例えばミュンツァーに対し、彼の革命的パンフレットについて、ルッターの「叛逆の悪霊を排撃してザクセンの諸侯に与える手紙」のなかで、ミュンツァーをサタンの道具だと宣言し、諸侯にむかい、手をくだして暴動の張本人どもを国外に追放せよ、と促し、こうも言った「見よ、あそこにサタンがうろついている、アルシユテットの悪霊が」と。

（前掲書）  
ルッターの言説をいまずこしくのべると彼はその第一段階に於ては叛乱者に対しその抑圧者に対するよりは大いに

好意的に語っていた。しかしそれは農民要求が平和裡に行はれる為で「我々はこの暴動や叛乱に感謝しない人は公子達や目先のみえない司教達や、狂った僧職や修道士達を除いては無いことを知っている。今日迄彼等は聖なる福音書に怒り、ののしることをやめず、諸君はそれが正しいこととそれに反対をとなえることはないけれども」、と言い、尚更に、「広い範囲で君達は貢納につとめ、はぎとられる以外にはない。それでも貧しき普通人がそれに最早耐えることが出来ないときまで諸君ははなやぎと虚栄の中にいる。刃はいまや君達の首に擬せられているのだ。諸君はその立場に緊縛されていて何人も救いの手を差しのべ得ない。かかる思いこみやがんこなプライドは諸君が見得る様に君達の首をねじまげるだろう」とのべた。ルッターの言葉は明確ではない。それに言語が難解なものが多い（これが曖昧さに通じるのであるうか）。更に「神は彼等が最早諸君の怒りに耐え得ない様に仕向けられた。もし諸君がそれを君達の自由意思で行はないとしたら、そうしたら君達は暴力と破壊でそれをなす様に仕向けられるであろう。我が親愛なる領主達よ、君達に彼等を刃向はさせてきたものは、農民達では無い。君達の悪業をこらしめる為に神を諸君に仕向けたのは、神それ自身なのだ」。ルッターは宗教家として人間の運命を規定し導く、常にその道にいる神のみわざを顕彰する。共産主義革命の成就にとってかかる思想は阿片として物事の進行を反動さす以外のなものでもない。エンゲルスが宗教家それ自身の宗教的言動をとりあげず、すべてを支配者抑圧者の苛斂誅求と搾取、被支配者の苦患と反抗に要約してしまうのはその面では全く正しく、それは十分に理解出来る。しかしそれでは歴史の純粹科学的解明にとつては役立たない。

ルッターは公子達や領主達に彼等の農民達と談合する様にすすめ、一二ヶ條をひいて、そのある條項は正しく、神と世界の前にその価値は明らかであるとのべる。農民達に向つては、聖歌の言葉は公子達を軽蔑する、とのべるが一

方、彼等に反乱や暴動をいましめ一二ヶ條のあるものは聖書のころにあはない、と警告するのであった。彼の宣言は要約すると、領主も農民も双方が間違っている、という事であり、領主達は農民を無用に刺激したし、農民のある要求、例えば一割税(tithes)は支払わないと言うのは明らかに行きすぎであり、福音書の心にあはず、泥棒的である、というのであった。

ルッターの言説は農民達に彼等の味方であり、叛乱をよみしていると理解されるのであるが、そこに彼の言葉の曖昧さがあつた、とされる。彼のパトロンであり心友であつた選挙候フリードリッヒ (Elector Friedrich of Saxony) が五月五日病の為亡じ、後継は兄弟のヨージ (Johann) となつたが、彼もチューリンギア叛乱抑圧の立場にたつてゐた。ルッターはこのためサクソニーのアイスレーベンに赴き、その後ウイッテンベルクにいつたが、その道、ミュンツァー派の人々から様々の干渉を受け、彼の行つた説教は彼等の打ならすべしでかきまわされ、また絶えず一二ヶ條の條項が彼にあびせかけられた。農民達はルッターの思想と行動を充分本能的に理解してゐた。そしてルッターの貴族の友人達の財産に乱暴が加えられた時、彼の怒りが爆発した。それが彼の第二の宣言「殺人者と大泥棒の農民隊を消せ」("Against the Muddrous and Thievish Bands of Peasants", "Wider die morderischen und rauberischen Rotten der Bauern")の公表となるのであつた。ここにルッターの変化、変節と云えば云えるそれが、最初に説明した様に明確に宣言されたのであつた。彼の言葉は激越で、「権威者にしてこの叛乱を根こぎに出来ない者は神を冒瀆している」とか「神に従順であり、ロマ書XIIIの命令に忠実な犠牲は、神にのみされた最高の死である」とかといった言葉がのべられている。これらには次の悪評が加えられている。「この第二回の宣言は、ウイッテンベルクの革命的僧徒の強力な個性に消し難い汚点を残した」と。

説  
南独の敗走

## 論

頭目トルヒセス (Tuchsess) の指揮下にあったスワビアン連盟軍は叛乱軍とのウエインガルテンに於ける休戦と和解條約によつて息を吹きかえた。この條約の意義の大きさははかり知れない。叛乱軍の三派遣隊 (Ried, Lake and Algau) は、スワビアン軍よりも数に於て、分捕つた大砲等の準備に於て、彼等の占領した重要拠点の意義に於てはるかにまさつていた。それがあつさりトルヒセスに事実上明け渡されたのである。「何故に」は、トルヒセスの弁説とお世辞による籠絡とされている。しかし眞相は時勢の変化に求められるべきであろうか。スワビアン連盟軍は、南下をはじめ、道に抵抗する農民軍を次々打破つていった。その行程は大略次の如くであつた。

四月二五日、黒い森農民派遣軍との接触で両者交渉にのぞむこととなつたが、これは失敗し、スワビアン連盟軍はウルリツヒに向つてその近傍にキャンプを設営した。しかしこのときウルムのスワビアン連盟評議会の強固な命令で心ならずだが道をかえ、ウユルテンベルクにむかうこととなつた。その救出の爲である。その途次五月七日、上部パラチネイトのパラチネイト伯 (Count Palatine) 派遣の騎兵隊を加え、このときウエツチンゲンを占領した農民軍を攻め、これを瞬時に攻略した。農民軍はここでも修道院等を襲ひ略奪戦利品を多数の車に積んで帰還の道にあつたのであるが、不意を討たれ潰滅した。殺戮がこれにつづき千人の農民兵が殺戮されたという。連盟軍は今や六千の兵員、千二百頭の馬匹を有し、ウユルテンベルクに到達した。このとき農民軍は一万二千名を数え、ここでドイツ農民戦争中白眉の決戦が展開された。戦闘は四時間にわたつてボーリンゲンとシンデルフィンゲンの間で戦はれたが、ボーリンゲンの市民達の裏切りに会い、その城門が連盟軍に明けわたされ、またパラチネイト騎兵隊とオーストリア軍がこ

れと呼応して農民軍の正面を強襲し、四個中隊の歩兵が側面を一斉銃撃する等して、朝一〇時に開始された戦闘は午後二時までを終了し、農民軍は逃走に移った。そして騎馬隊による追撃が彼等に凄惨な殺戮を加えた。犠牲二千とも六千ともいわれる。

捕われた農民兵の中に笛吹きメルキオール (Melchior Nonnemacher 旧主ヘルフェンシュタイン殺戮に加わつて笛をかなでた) がいた。彼はリンゴの樹に二歩の余裕をもつた鉄鎖でつながれた。まわりにわら束がうす高くつみ上げられ、火がかけられた。こうして彼は長時間窒息に苦しみぬいて死んだ。戦後処理は叛乱民の根たやし策戦となりウルテンベルク近傍の村々、街々が探索され、多数の人々が、絞首、斬首の厄に会い、人民の権利を守ろうとした指導者は捕らえられてニレの樹に縛りつけられ、笛吹きメルキオールと同じ運命にあはされた。彼の苦痛の長時間の死を公子達が見物した。これらの街村にはウエインベルク、ネツカルサレム、オエヒリングン等も含まれ、後二者は街が砲撃された。農民軍に好意を示したとされるホーヘンローへの伯爵達はトルヒセス直々の審問を受け、再度あやまちを犯さない事を誓はせられた。

農民軍の頽勢はその潰滅へとつづくが、黒い森、ブレイスゴウ、オーストリア領にはウウルテンベルク以後も農民軍は猖獗し、またフラウエンブルク、ウウルツブルク等の形勢も予断を許さないものがあつた。ゲッツ (Götz) の率いる一隊は、マリエンブルクのウウルツブルク城攻略に向つたが失敗し、尚戦争評議会によつて彼に八千の農民兵が託されてトルヒセスとパラチネイト軍の連結を防げる任務が与えられた。しかしゲンツは何を考えたのか、一夜闇にまぎれて姿をくらましてしまった。残存部隊六千はトルヒセスと連盟軍に仇を報ゆるべしとして、トーベ河畔のケーニヒスホーフェンに進んだ。しかしここで公子連合軍にあい、六月二日、その攻撃を受けて一たまりもなく潰滅した。

一千の兵が尚森林に保塁を築いて抵抗したが忽ち蹂躪され捕虜五百名が槍で突き殺された。

このときトルヒセス軍内に給与の支払い問題が起り、内部叛乱必至の情勢となつてこれはこのニュースを得た農民軍をすこし勇気づけた。

#### 第四章 ドイツ農民戦争の潰滅

##### フロリアン・ゲイアのたたかい

ここでドイツの自由を愛する人々の敬愛的となりその抑圧に対する反抗者としてたたえられたフロリアン・ゲイアの登場となる。彼はウウルツブルクの設営からはなれ、数隊の農民派遣軍を結合してウウルツブルクに向つてきた公子達を道に迎え撃つ策戦をたてた。農民兵は彼等の村々が焼かれ、捕虜となつた友軍兵士達が木々にくりつけられて同じく焼殺されたニュースを聞き血の復讐を誓つた。このときトルヒセスは軍内の叛乱的空気の中で雇傭兵達に身柄を拘束された。しかし連盟軍に救出されて彼は怒つて首謀者達を処刑しようとしたが、情勢上それは許されなかつた。

ゲイア軍は情報不足でこのときケーニヒスホーフエンの悲劇を知らず、友軍は健在だと考えていた。彼等はインゴルスタット城下に至つたが、このとき彼等はすでに包囲されていた。気がついたとき敵の攻撃がはじまり、不意をうたれて農民軍は四散した。ゲイアは渾身の力をふるつて精鋭を集め、彼の大砲を据えつけ、応戦しようとしたが、敵の砲撃がそれに先んじた。雷鳴の様な砲撃に味方は破碎され、退却の命令さえきこえなくなつた。こうして農民軍

は八方に逃げ散るほかなかった。このうち六〇名の農民兵がとらえられ、連盟軍がこれから身代金をうばう計画をたてたが、トルヒセスは六〇名の屠殺以外許さなかった。ゲイアー軍は残存五百名がインゴルスタットに木柵の砦をたてて中に立て籠もったがこれもパラチネイト伯ルドビツヒ (Count Parinate Ludwig) の教に数倍する軍に捕捉されて同じ様に破却された。ここで、ゲイアーは人々の記憶に残る最後の決戦を敢行する。彼は残存二、三百名を率いて、村の高みにある城に逃げこみこを補強して攻囲軍に対峙した。古い封建的城砦は戦火にまみれていたが頑丈であった。攻囲軍は一もみにもみつぶそうと襲いかかったが、城はもちこたえた。砲撃もさしたる効果なく、攻囲軍は騎士、卿士、雇傭兵このときは力を一にして城攻めに狂奔したが、敵の打ち出す弾丸で、百名以上の死傷の山をきびいてしまった。攻囲軍は突破口を開こうと躍起になったが、このとき城内からの射撃がハタとやんだ。一瞬の空白が戦場をおおった。ゲイアー軍の弾薬がつかたのである。しかしゲイアー黒衣軍は自らを放棄しなかった。最後の戦いは剣による白兵戦となり、五〇人の勇士が城の地下室にたてこもって抵抗した。最后二百名程となったゲイアー軍はこのとき夜をむかえて死体の山が残された城に公子軍が殺到したときそこを脱出した。ゲイアー軍は森に逃げこんだが、朝を迎えて無数のトルヒセス軍に追討され、殆んどが惨殺された。しかしフロリアン・ゲイアーの死体はそこに見出されなかった。彼は数名となった兵士と共に囲みを切り開いてそこをも逃れた。そして道をウユルツブルクにとつたと考えられている。その道の村々はトルヒセス軍に火をかけられて焼けただれていた。

このとき近傍の農民軍は未だゲイルスドルフ派遣軍 (Gaisdorf) を含んで七千の精強を誇っていたが、ケーニヒスホーフェンの敗北とインゴルスタットの惨敗を聞くに及んで逃亡が相次ぎ、夫々の故郷へ帰つて、夫々の封建領主に忠誠の誓いを捧げる情態となった。

フロリアン・ゲイアーは、数名の雇従共々はるか南方のスワビッシェ・ホールに現れたが、そこで彼の婚約者 (his behohed) の兄にあたるウイルヘルム・フォン・グルムバッハ (Wilhelm von Grumbach) の騎馬隊に発見され数刻の激闘が展開された后、そこで討ちとられてしまった。この事件には彼の家族的嫉視争いがからむとされる。しかしゲイアーの死には異説があり、ある説は、彼が六月九日、リンパル附近の野で刺殺されたという。この他にも色々言はれている。数世紀の後まで、彼の花嫁が彼女のお城の庭を月光の下にヒラヒラと舞い遊ぶのがみられたという。こうしてフロリアン・ゲイアーの運動は終息し、彼の名のみが語りつがれた。それも年配の人々の間で。

トルヒセス軍も甚大な損害を蒙り、軍の四分之一が失はれたが、その友軍も大きな被害を蒙った。そしてウエルブルク城にはまだ数千の農民軍がいた。トルヒセス軍は六月五日の聖霊降臨日に近傍のヘイデングスフェルトにいたり、そこに陣をはって大砲をすえつけた。しかしここで市長、旧評議員、裏切り者等が、トルヒセスとパラティン伯に極秘に接触し、交渉がはじまった。トルヒセスの條件は次の如くであった。①多額の身代金を後者と司教に支払うこと。②武装解除。③司教への忠誠が回復され、すべて旧状に復すること。④街に在る農民の首領達は降伏を誓うこと。欺瞞ががちを占め、六月八日トルヒセス軍はウエルツブルク市に勝利の入城を果した。千五百名の兵士が行進した。農民、自由主義者、叛乱民等が三ヶ所に集められ、また近傍の街からも集められた。彼等はすべて無帽となりトルヒセス等にひざまづいて許しを乞うた。しかし一時間の後、処刑がはじまり、合計八一名の指導者が斬首された。一般農民その他は街から追放となったが、その多くは家路に於て自由戦隊に追いかけて殺戮された。最后、街はスワビアン連盟に八千、司教、僧職、貴族等に二〇万グルデンの賠償金が支払はれた。この後も農民軍は処々方々で攻撃され、捕虜は情け容赦なく処刑され、賠償金がとられていった。ウエルツブルクで農民軍がたてこもった聖ブルクハル



ト教会は、驚く程の要塞化がはかられ、大きな濠が幾重にも掘られていたが、最後の攻撃を受けて聖徒像や領主像の首は打ち落された。フロイエンベルクのマリエンブルク、ネルドリンゲン、ローゼンブルク、フランコニア公国、バンベルク等、この戦火の例外ではなかった。フランクフルト・アム・マインは、贈賄で破壊をまぬがれた。トルヒセス軍は、上部スワビアに進み、メミンゲンも内通で陥落した。ここは早くから「農民議會 (Peasants Parliament)」が開かれ、「一二ヶ條」もここで起草されたという街であつた。談合の結果、百名の騎馬武者が街に入ることとなり、人々はすべて武器を捨て、家路についた。その途端、街の城門が開かれ二百の騎馬隊と二千の歩兵がなだれこんだ。結果は他の街々村々と同様となつた。ここで数名の市民が示談に成功して街から逃れたが、その中に「一二ヶ條」の起草者と云われる伝導師シャペラー (Schappeler) もいた。彼は故郷の聖ガレンに無事辿りついたといわれる。

アルガウの街も最大の贈賄と内通で陥落した。この農民守備隊は精強と充分な装備で鳴り、指揮官三名、パツハ (Walter Pach)、シュナイダー (Kaspar Schneider)、クノッフ・フォン・リュイバ (Knopf von Luitbas) はイタリア戦争、オーストリア軍中等で有名であつた。フリードリッヒ大公 (Archduke Friedrich) は上部スワビアはオーストリア家の知行地としたい熱望を有したのでこのことをトルヒセスと交渉したが、これはウルムの連盟評議會が拒否した。ここには集結した農民兵は二万三千と云われ、農民軍中最多最強を誇っていたし、戦いは農民側必勝と予測され農民叛乱も尚継続するといわれたが、ここも裏切りと内通で農民軍総くずれとなつておわつた (七月二一日)。内通の立て役者は、パツハとスナイダーであつた。多額の金銭が叛乱軍の指揮者にばらまかれ、トルヒセス軍の砲撃と共に火薬庫に火がかけられて大爆発が起つた。農民兵はあらかじめの指示どおり四散した。しかしリュウイバと彼の軍はこの陰謀を知らされていなかった。彼の軍は不意打ちをくらつて八方に逃げ散る以外なかつた。街は火災を起し、

炎々と燃えるほのおは二百の村々家々をなめつくした。これは街の婦人、老人、子供達を焼き殺し、戦闘も不可能となつた。リュイバは残存軍をまとめてケムプテンの街の丘にのぼつて地歩を固めたが、トルヒセスは糧道、水道をたつてその上あらゆる出入口をふさいだ。彼等は結局降伏を余儀なくされ、結果、何時もの如く忠誠の誓いと多額の賠償金が彼等に課せられ、合計三〇名の指導者が斬首された。リュウイバは一旦逃亡に成功したが、程なくとらえられ、彼の場合は長期の入牢の後処刑された。トルヒセスはケムプトンとカウフボイレンの街に強力な部隊を駐留さすこととなり、こうして上部スワビアの農民戦争は終局に導かれた。

### ドイツ農民戦争と東欧軍

アルザス・ロレーンの農民戦争は五月一七日に戦はれていた。農民軍はザベルンの包囲戦で敗北し、リプスタインに入つていた。ここでロレーン大公アントワヌ (Duke Antoine de Lorraine) の独伊混合軍が街を包み、火がかげられた。激闘は七度繰りかえされたというのが農民軍がたてこもつた教会も燃え、最后、農民軍は慈悲を乞うて降伏した。しかし時、おそく、攻撃軍は突入した。このときの殺戮は二千から六千に及ぶという。この殺戮は凄惨、残虐、農民戦争中でも先例をみない、という。そのにない手は東欧の軍勢であつた、とされるが、八才、一〇才、一二才という子供達が情容赦なく殺され、少女や婦人は麦畑の中をひきづりまわされて、ラビッシュユされ、挙句屠殺の如く虐殺されたという。この報が一度び近隣に伝はると一瞬にパニックとなり、一夜に三〇台のワゴン車が、婦人、子供、農民兵等を夫々満載して村々街々を逃げ出した。彼等はストラスブルクの街、コヒエルスベルクの城門に至つた。このときパニックがザベルンの街にも飛火した。農民兵は戦いをやめ大公の下に慈悲を願ひ出、武器をすてて城門を開き、

そこからあふれだした。しかし彼等先導していた公子軍の傭兵達との間に衝突が起つて、今や武器なき彼等は傭兵達の餌食となつて処々に惨殺された。市民達もこれにまきこまれて多数が殺された。そこを逃れた農民達は最后、ロレイナー軍の手によつて殺戮された。この殺人は公子達の介入によつて漸くとめられた。街は危うく火がかけられようとしていたし、住民はロレーンの十字架を胸に結びつけることによつて難から目こぼしを得た。この皆殺しのきっかけは門からあふれ出た農民兵の一人とこれについていた傭兵隊の一人が喧嘩をはじめたことから起つた、という。即ちその農民兵が、傭兵から財布を奪はれようとしたという誤解によつて争いが起つたのがきっかけとなつて傭兵軍が農民兵に一斉に襲いかかったのだという。これが虐殺のはじめであつたが、このとき農民兵達が、ひかれ乍ら口々に、「ルッター！ルッター万才」をとなえていたのも傭兵達をイライラさせ、その怒りが無意識に爆発したのであつた。宗教的別意識がこの際も矢張り背景となつてゐる、と考えるべきであらうか。事実アントワーヌ大公はこの殺戮を「新しきルッター主義に対する聖戦」と呼んでいたことも忘らるべきではない。この大虐殺は数えて一万二千から二万名にのぼり、路々は死屍におおはれ、血潮は流れて川をなす程であつたと形容されてゐる。

その他農民軍が破れ去つたところの記録をたどると次の如くなる。コンスタンス湖沿いの農民運動は、ヘイガウのそれがストツカッハ、ゼルの駐屯兵と戦い破れたが、後者では数ヶ村に火がかけられ、婦女、子供達が焼き殺された。一五二四年の一〇月に大規模な「教会祭」が催され該地の農民運動の基礎が固められたとされるヒルチンゲンは七月一六日にウエルデンベルクのカトリック伯爵 (Count Felix von Werdenberg) 外人部隊に攻撃され大敗し、と殺と逃亡が織りなされた。南西ドイツ最大の農民指導者と称されたハンス・ミュラー (Hans Müller von Bulgenbach) が捕えられ斬首されたのもここであつた。彼の領袖の一人であつたコンラッド・ジェルも同じく捕えられ樫の木に絞

首された。それは黒い森地帯の聖ブラジエン修道院 (Abbey of St. Blasien) の領地であったが、或朝その屍体の右腕が同修道院の大扉に釘で打ちつけられていた。そして「恨みはこれが晴らす」となぐり書きがあった。しばらくあとに修道院財困の建物から火が出て、それが焼き落ちた。火付け犯の捜査が行われたが怪火の原因は結局不明となった。

その他では一五二四年の九月、フェルジナンド大公 (Archduke Ferdinand) が、ブレイスガウ地方の農民運動を厳しく排除しようとしたが未だその軍事的名声の大きなものがあつたスイス (the Swiss) が農民軍の要請を受けて仲介に乗りだし、一つの協定が生れた (the Treaty of Ofenbourg 九月一八日)。それは領主達が旧権を回復し、徴税と奉仕ももと通りとなるというもので更に各炉につき六グルデンの科料が課せられるというものであつた。しかし農民側は表面上これを受け入れたが、内心反発し、叛乱気構えはこれで消えることはなかつた。「力が暫はせるが神はおぞましく思はれる (Erzwungener Eid ist Gott Leid)」という叫びが広がつていった。この情勢の中でフライブルクは来る冬期の間三百人の常備兵を村落に配してくれる様オーストリア当局に要請した。バーデンのマークグラフ (Markgraf Philip of Baden) の領地では最も寛大で人間的な條件が農民達に与えられたが、ワルトシャットは早期から農民運動の中心地として近隣諸邑が降伏しても最後まで抵抗をつづけた。しかし二月二日、遂に落城し、例の如く殺戮と賠償が課せられた。革命的説教者であつたバルサザール・フンプマイアー (Balhaser Humbmayer) は人々の手で一旦逃亡に成功するが、四年の後発見され再洗礼派 (Anabaptist) ツィングリ Zwingli から起つた宗派、成人後の再洗礼を必要と主張する) として火刑にされた。

一五二五年の争闘

一五二五年の争闘にかえると、農民戦争の終局が前節に引きつづき展開されるが、五月一二日にはペーリンゲンが落ち、これがウユルテンベルクの農民戦争を終結に導いた。三日後には、チューリンジアと近隣村落の農民叛乱が終息したが、これはフランケンハウゼンの農民軍が手痛い敗北を喫した結果であった。ザベルンも同様の運命に見舞われた。

こうして農民戦争は農民叛乱の相次ぐ敗北の中に決着を迎え、六月二日にはケーニヒスホーフエンがスワビアン連盟の手に落ち、同じく上部スワビアのリュイドが裏切りによって陥落、九月中旬を以て農民叛乱最後の残光も消え失せた。その原因は①公子軍やスワビアン連盟軍の正規性、組織、装備、経験等が時がたつにつれ急造の農民軍に対し、効果を發揮したこと、②農民が叛乱の最中屢々描写した様に各倉庫をあばき酒蔵を開け、鯨鯨、暴食を重ねて敵に乗ぜられたこと等があげられる。農民兵の処罰は、みられた様に絞首、斬首、虐殺といたところで展開せられ、八月末開かれた議会 (Reichstag) の詔書がおくれば乍ら不法を禁じ、慈悲と憐憫を領主達に命じ、きかざるは必要のとき援助を与えない、と布告したが、時、既におそかった。こうして人々は解放と改革のすべての望みを失った。彼等の願望はしかし決して消失しなかったし、農民叛乱の火も一五二五、二六年とくすぶりつづける。特にザルトブルク大公国ではそれは根絶なきことでは無く、別してチロルでは、かの有名な多才の農民指導者と称されたミカエル・ゲイズミイル (Michael Gaismyr) の下で六月一五日開かれた州議会に於てその大公から彼等は実効的な特許をかちとった。そしてオーストリアでは尚この時期農民叛乱は活動的であった。これに一瞥が加えられねばならない。

## 第四章 オーストリア・アルプスの灼熱光

## 外人部隊

オーストリアでは尚この時期農民叛乱が間歇的に生起した。スチリアのそれはシギスムンド・デイトリツヒスタイン (Sigismund Dietrichstein) が抑圧したがこれを終息する迄には至っていなかった。このとき彼は捕らえた農民兵や農民達を狂気とも云える残虐さを以て処刑した。例えば妊婦の腹をさく、捕虜を突殺する。生身のかわをはぐ、四つ裂きにする等で、また彼の支配地区には高額の身代金やみつぎ物を課した。スチリアとザルツブルクの農民連合軍が彼と談合を持つこととなった。彼は兵を伏せて最初から裏切るつもりでこれにのぞんだ。しかしこのときは農民軍の動きが早く、七月三日、彼は宿泊所をおそはれミサイルでうたれた上、二百の部下と共に馬で逃走をはかったが馬をさらわれ、多数の騎士が落命した。彼や他のものは教会に逃げこんだ。このとき四千の農民軍がおしよせて公子軍は敗北し、多数の騎士が捕虜となった。他のものは逃げまどったが多数がきられ、また流れに投げこまれた。捕虜は農民軍の前に引き出され、四千の農民兵が彼等をさばいた。その処理については色々意見がわかれたが、デイトリツヒスタインも捕虜の中に居り、騎士的取扱いを主張した。結局ザルツブルクの農民評議会が決をとることとなったが、農民側の意見がここで調整され、ボヘミアンや他の外人部隊が市の市場で斬首され、デイトリツヒスタインや他のドイツ人貴族や騎士は処刑をまぬがれた。彼等は騎士の衣裳をはぎとられ農民の服を着せられ、農民帽をかぶせられワゴンにつみこまれて農民軍占領下のウエルフェン城につれこまれた。そこでデイトリツヒスタインや他の貴族達の財宝、財産が発見されあばかれた。この情勢下スチリアで農民叛乱が再起した。課税の軽減が求められ、地方議会がボー

ゼンで開催されることがとりきめられた。しかしミカエル・ゲイズミルは更にもっと根本的攻撃を志向していた。彼は指揮権を放棄して隊をはなれた。そしてこの間トリエント等が攻撃されたが、地方議会のとりきめに反対する数個の自治体があらはれ、またこれを非難する指導者が出るなどした。一方公子軍はこのとき一万六千と称する兵を集めた。この大軍の攻撃が分裂した農民叛乱を圧迫、最后これを粉碎した。手足の切断、四つ裂き、突殺、生き乍らの焼殺等が農民軍に加えられた。しかし多数の農民兵はイタリアに逃げ込んだ。農民軍と領主達の交渉が断絶した。ゲイズミルは逮捕されインスブルックに連行された。しかし彼は一八州の街や村落の支持を背景に亡命を要請した。ババリアの公爵ウイヘルムとババリア首長フォン・エック (Leonard von Ech) は、ババリアのウイツテルスバツク王家 (Bavarian Wittelsbachs) とオーストリア・ハプスブルク家 (Austrian Hapsburgs) との対立の尾をひいていた。情勢は複雑であつた。ザルツブルクの大司教はザルツブルク叛乱の鎮圧をスワビアン連盟軍に要請していたがウイヘルム公は平和を求め、農民軍との交渉の中で古税と夫役 (Corvée) を復活させた。また農民叛乱の賠償としてスワビアン連盟軍に一万四千グルデンを支払はさせた。しかし農民軍は潰滅したわけではなかつた。草叢がグリーンになつたら、というささやきが広がっていた。そのときは貴族や神士は一掃されるのだ、と。

この平和の結果ウエルフェン城の捕虜達は大司教を含めて解放された。農民は恨み深いはずのデアートリツヒスタインの取扱にも寛大であつた。しかしフェルジナンド大公や公子達は農民の動きに不安で特にシュラットミンク敗北の記憶は消しがたかつた。こうした最中サルム伯 (Count Salm) と傭兵達は突如街に突進し、これに火をかけた。逃げまどう人々は性や年齢など無差別に炎の中に押しもどされ、虐殺がはじまつた。シュラミング近傍の人々は木々に絞首され、街は灰燼に帰した。農民は復讐を誓つたが各自治体は自ら条約を破棄することにやぶさかであり翌年ののはじ

めまでこの状態が持続する。ゲイズミールはスイスに逃げこみ、チューリッヒ、ルーゼン、グラウブunden等を訪れたがチュールでフランス王フランシス一世 (Francis I) の使者と会見したと噂された。王はチャールス五世 (Charles V) の支配下にあり、皇帝を悩ましたい野望をもっていた。ゲイズミールは一五二五年末チロル国境のトウフェルに住居をかまえ翌年一月宣言を發して平等社会の確立を訴えた。眞の神と人々を迫害する者達の廃滅、偶像、カソリックの聖さん式、同聖廟の廃棄、街々の城壁、塔、城塞、要塞をとりこぼち更地とする。アトにはただ平和な村落が残り、ここに眞の平等社会が実現する。微罪裁判官が民衆の選挙でえられ、毎月曜日に法廷を開く。全法律職は人々の淨財で賄われる。中央政府は全国から選ばれ、大学はブリクセンに設立されてその中から三名が終身税額適正査定官として政府に所属する。各税 (taxes) 各レンタル料 (rents) は廃される。一割税 (tithe) は徴収されるが、これは改革教会と貧民の為にのみ費消される。修道院は病院と一般学校に改組、家畜飼育の改良、灌漑の効率化がはかられる。サクロン、葡萄、コーンは至る所で栽培される。各商品は適正価格で取引される様監視される。高利貸し、貨幣製造の劣質化等は罰せられる。鉱山は全国共同所有、道路、航路、橋、河川は公けに管理され、外敵防御の施策が施される。これが宣言の壮大なプランであった。

この宣言プランは直ちにチロルの村々に流された。農民軍は勢いづきここに彼等の最後の戦いが展開された。ゲイズミールは農民軍の頭となり、司令官となった。彼の僚友が帷幕の参謀となった。戦闘の中心はザルツブルクとスチリア、カリンシアの国境の街ラットスタットであった。この街の占領は戦略的拠点の制圧となりまたフェルジナンド大公爵の大砲陣地の取得となるのであった。大公爵はゲイズミール蜂起の報に直ちに彼の一隊をそこに送った。スロピアン連盟も小隊を送った。ゲイズミールは街に通じる各道路を封鎖してかまえた。攻撃軍は、山地を進撃したが、



途の半ばで、雨とみぞれにあい進軍困難を極めた。農民軍はうって出てそこをついた。千名を越す攻撃軍は、算を乱して討たれ、結局最后二百に満たぬ人々がそこを逃れることが出来ただけであった。この後も農民軍は優勢を保持し、六月一四日にもスワビアン攻撃軍の八中隊を山地で破った。残存軍は山の暴風にあい多くの兵が失はれた。しかし連盟は増援軍を送りつづけ、これが最后功を奏して、七月三日にこれら地方で連盟軍は農民軍を破った。農民軍の戦死六百と報じられた。ゲイズミールはラットスタット突入を図ったが攻撃は三度とも失敗した。これが契機となつて攻守ところを替え、彼はサルム伯と連盟軍に包囲されるに至った。結果、彼は逃亡に転じて辛うじてベニスに到着し、彼の軍は最后ベネチアの領土に追い散らされた。ゲイズミールはベニスで四百デユカの年金を受取つて生活することとなり、一時は大枢機卿の様な生活を送つたと云われている。何れにしてもゲイズミール叛乱はここに終息した。

### ドイツ農民戦争最后の一戦

しかしゲイズミールの一挙は農民戦争の最后を色どる希望に満ちたそれとなつた。この呼びかけがザルツブルク、チロル、上部スワビア等に於ける農民叛乱を誘発したことは否定され得ない。ゲイズミールのプランは人々のこれまでにない感奮興起の情熱をかきたてて新時代の幕あけとなるべきものであつた。また彼が駆使した外交技術はフランス人、ベネチア人等との軍事提携の実現にむかうものであつた。これは結局实效をみなかつたけれどその遠見の達識と手腕は高く評価されている。彼の右のプランと実行は、農民戦争の最后をかざる天恵のそれとして華々しく打ち出され、そして華々しく消え去つた。

ハンス・ゲイズミールは彼の兄弟であり、ハンスはステルチングに居住し、農民戦争の勃発を画策したが、結局失

敗。オーストリア当局に逮捕され、四月九日、インスブルックに転送されて、狂気の拷問の末、叛逆者として処刑された。この兄弟の運命がミカエルの運動の一つの柱となっていた事は疑い得ない。この点ミカエルは後に出るレーニン等と革命家としての運命をわけていたともいえる。

農民戦争が宗教戦争であったことは屢々ふれたが、この農民戦争の敗北はプロテスタントの街々、村々でカソリックの封建領主が、ルッター主義の撲滅に出ることを恐れなければならなかった。チロルの潰滅は、ここでも方々で行われた農民戦争の後始末をみることとなった。指導者の処刑、武器の放棄、忠誠と従順の誓い、一人頭八グルデンの罰金、タウンゲートに集まった群衆の蹴散らかし、叛乱に加わって逃亡した者達の家屋の引き倒し、破壊、その後の更地には赤く塗られた標柱がたてられた。叛乱の街は行政上、村落に格下げされた。ラットスタットやゼルでは、ゲイズミールの叛乱軍に城門を閉めて抵抗した為、この二つのタウンには特別報償が与へられた。各聖霊降誕祭の月曜には彼等はザルツブルクの聖リュウブレヒト大聖堂の説教壇のまわりをその地方の歌をうたい乍らまわる儀式の執行を許されたのである。その夕べ、彼等は大司教の地下室で歓待され、それには大聖堂参事会員や従臣が加わった。また聖バイタスの日 (St. Vitus's Day) のアトの火曜日には彼等の邑の旗を市会議事堂にかかげ、大司教管下の地下室からのワインのギフトを与えられた。その他封建的大君主 (Feudal overlord) の保護領で釣魚の権も与えられた。

一五二七年を通じて人々はミカエル・ゲイズミールの再起に心を悩ました。フランス、ベネチアの人々との連携がこのときも語られた。プロテスタント地区の協力も問題であった。外人部隊は敵である彼の勇氣について語った。彼はベネチアからトリエントに進みチロル溪谷で、ベネチア共和国の保護の下に彼等にチャールス五世からのフリー・ハンドを確保するという噂も流れたがその様な徴候は遂にみられなかった。彼は、しかし一五二八年の早春にスイス

に現れたと報じられた。そしてチューリッヒで市民権を得た事が確認されたがベネチア共和国の全権大使としてスイスの各邑、ドイツ有力プロテスタント、ウエルテンベルクのウルリッヒ伯 (Ulrich of württemberg) 等と夫々交渉に入った。彼はこれらの結合を以て皇帝に対決する。そして六月中旬には数千名のスイス部隊がオーストリアに通じる山間部で彼に合流するという噂が流れた。しかしそういった徴候は決して無視出来ぬものであったが、その実現は不たしかであった。そしてこうした情勢の中、一五二八年八月迄ミカエルの力の流れは継続したが、その一九日、チャールス五世がネーブルスで勝利を収めたというニュースが出て、反皇帝勢力は一挙に情熱を失った。

ミカエル・ゲイズミイルの首には既に懸賞金がかけていた。フェルジナンドと彼の評議員達の力であった。ミカエルの部下にも手が及んでいたといわれる。最后二人のスペイン人が買収され、ミカエルが移っていたベネチアのパドヴァにひそかに送りこまれた。そして一夜暗殺は決行された。ミカエルは就寝中二人に刺殺されたのである。彼は心臓を一突きにされ、彼の首は切り落されてインスブルックの大公爵邸に運びこまれた。ミカエルの領袖であり勇猛で鳴ったベスター (Paster) は彼の部下に暗殺された。オーストリア宮廷がこれをあやつった。懸賞金はインスブルックで彼の首と引換えにわたされた。

こうして人民運動のすべての見通しは消えた。カソリック封建諸侯の恐怖の的であり、庶民の希望の星であったミカエル・ゲイズミイルは死んだ。彼の領袖達、指導者達は、四散し、或者は亡命し、或者は殺され、或者は獄舎にながれた。ウルリッヒ大公はその或者達を温存し、彼等を使って彼の世襲財産を再び手中にしようとしたが、彼等自身の権利の為に自ら戦った農民達のたすけを借りて、という彼の目論見はその様には運ばなかった。

ミカエル・ゲイズミイルの死と共に農民戦争最後の輝きは消え、それと共に庶民の戦いの火も消えた。

## 第六章 むすび

論  
ルッターの宗教改革とドイツ農民戦争

前節までが一五二四年、二五年を通じて荒れ狂い、一五二八年夏の最後の決闘にまでいたるドイツ農民戦争の歴史叙述であるけれど、この騒擾がドイツの歴史に如何なる意義をもち、その後の歴史に如何に影響したかということは複雑でむつかしい問題であることは勿論であるが、以来五世紀を閲しても世界の農業問題は解決しない。後にふれるが、農村革命がロシアや中国特に中国でその何千年の積弊を精算する為に血涙の変革を果たす原動力となったが、ロシアに於てもまたその中国に於ても農民戦争が社会、経済、歴史に驚天動地の大変革をもたらす引金となりながら、その後の社会に於てその原動力となった革命オールマイティの農業のその農業自身の改革は失敗に帰している。この農業経済の全国家経済組織にしめる矛盾した機構間の相克については前稿（法学論集第四五号、「朝鮮中の抗日と大日本帝国の互解」（七）、第二章、絶対矛盾の自己撞着、近代資本主義）にふれたが、この意味でドイツ農民戦争は、右述の社会変革、革命の原動力の役割を果し得なかつた。ここにドイツ農民戦争の決定的悲劇があつた。エンゲルスがこの悲劇から一八四八年革命の刺激を求めようとし、その後の革命への教訓を讀みとろうとした熱情は理解出来るけれどその点彼の言説も大革命への原動力成就の契機としてはいましばらくの時を待たねばならなかつた。

本稿ではドイツ農民戦争に於ける神の国としての共産主義思想の発現の態様を本邦一向一揆の「百姓の持ちたる国」思想との関連に於いて究明することを第一の目標としているけれど、まずドイツ農民戦争の態様についてその特長を

考えてみる。

一、そもそもドイツ農民戦争は、ルッターの宗教改革思想の発現たる免罪符爆撃から触発されてこの大騒擾を引き起しているがルッターについて考えてみるとルッターには農民社会の安寧、幸福の確保、そこでの神の国の実現といった思想はない。宗教改革即農民社会に於ける神の国実現という思想ではなかった。このことがみおとされてはならない。ルッターは農民戦争が猖獗するとさきふれた如くこれを激しく論難している。それは甚だしい荒々しさでまた騒擾農民の取扱いについても何ら一片の同情もない。彼に於ては農民の課税や諸々の義務 (concess) は父子相伝のもので何ら良心にやましいものではない。物質上のきびしい取扱いは神のよみされるところである。これがルッターの思想であるから改革者ルッターは社会経済的には農民側からすれば恐ろしくもおどまらぬ大反動であった。この課税の思想が中心で、この様なことであれば、彼について言うところは何も無い。しからば臣民は彼等の領主を賢人、聖人として仰ぎ見、常に彼に感謝をささげなければならない、ということになり、領主、如何に不正、不義、狂気であろうとも、これに叛乱する一片の理由づけもあり得ない、ということになるのであった。君、君たらずとも臣、臣たれ、というまさに封建道徳の大権化であった。

ルッターの宗教改革は、カソリック教の神とキリストと聖書、社会、僧侶の中のことであり、そこに於ての改革であった。その外界の政治、社会的改革や変革は、教会内部からとび出し、にじみ出たもの以外は不問であった。例えば財産や所有について彼はこう言っている。

彼 (キリスト) は実に処女マリアから父なる神の男性のこうした初子として生まれた…。それゆえ彼は王であり祭司である。しかし、彼の国は地上的でもなければ、地上の財宝にあるのでもなく、たとえば眞理・知恵・平

和・歓喜・救済というような靈的財宝にあるのであるから、本来靈的である。と言つても現世の財宝が締め出しをくうというのではない。それはキリストが靈的、不可視的な支配者であるゆえに、われわれは彼を見ることをえないでも、天上・地上・地獄の一切のものは彼に従属しているからである（ルター「キリスト者の自由」徳沢得二訳、世界の大思想、河出書房）。

神の国の共和国や共産主義社会の思想とこの言説は天地の差がある。どこまでも所有や財産は心の問題なのである。またこの一文からだけでも王、祭司、長子といった権力構造に何らの変革も疑義もない。これをキリストと重ねることによつてこれら権力構造の尊重すべき絶対性が主張されているのである。農民戦争の思想や行動と凡そかけ離れたものである。またこうも言っている。

さてキリストは榮譽と品格をもつ長子権を占めるように、彼はすべての彼の信徒たちとその特権を共有するがゆえに、彼らも信仰によつてキリストと共に王であり祭司でなければならぬ（同右掲書）。

国家、社会、経済、法律等現世機構の絶対的認識である。教会の改革と社会の改革とは、ルッターの思想に於て天地震壊の差があつた。尚こうも言っている。

かえつてひとは神の意に適うために、自由なる愛から、酬いを求めずにわざをなすべきだ。そこで神の意に適い、その意志をこころから喜んでなす以外に何を求めず。また見ないことである。神意を行なうことから、実際各人はみずから肉欲を禁ずべく節度と分別を得る（同右掲書）。

これも右二文と同断である。

エンゲルスの「ドイツ農民戦争」論に於ける戦略、戦術論

さてこのルッターを攻撃するのにエンゲルスは、これをルッターの裏切りとののしっている。その意図は何度もいう様によくわかるが、これは何としても無理である。ルッターの思想行動は右にみた様なものであり、凡そ農民戦争とは何のかかはりもない。ルッターと農民戦争のあれこれの指導者とは同時代人であり、直接間接の何らかの接触や関係がなかったこともなかるうけれど、それとこれとは話が別となる。また言えば、ルッターがののしっているのはローマカソリックの坊主共であって皇帝、君主、領主、公子達ではない。この点に限って言えば彼は当初からの大反動であり、反動を反動だとして攻撃するのは当然だが、一貫してその意味の反動であるものを裏切りとは言えない。鬼は最初から鬼であって鬼を悪魔として攻撃するのはいいが、これを裏切りとして攻撃出来ないのと同断である。エンゲルスはブチ・ブルが自由、平等、独立、友愛をかかげ乍ら共産主義の攻撃には、それが現れたとき、断固その抑圧にまわつた事を裏切りとして攻撃するのとならんでルッターを同じ線上で弾劾しようとしてその様な言説をなしたのであるが、土台論理上無理である（「ドイツ農民戦争」前掲書）。

何度も言うけれどもエンゲルスの「ドイツ農民戦争」は革命テーゼであって社会科学書でもなければ、歴史書でもない。それはいいとして問題は純粹科学的社会主義論である。これがある限りそれと異なつた言説を革命について行うことはいかなるものかというのである。

レーニンはいかういった考慮を度外視して戦術一辺倒のバンガード前衛理論をうちたて、まっしぐらにボルシエビキ革命に突入して成功したが、ロシアに於けるマルキシズムの流入発達と共にこれは、サンシモン (Saint-Simon) フーリエ (Charles Fourier) をのりこえる壮大な純粹科学的社会主義論を背後にもつていたからこそ可能であつた。右に

サンシモン、フリーエをきり、返す刀で彼らを擁護する様な言説をなすことは不可能である。

### ドイツ農民戦争の残虐性

一、ドイツ農民戦争の領主側と農民側の殺戮の激裂さ、凄惨さはまこと眼をおおう。それは本文に屢々出てくる如

くで、斬首、皮はぎ、生身焼殺、車さき、幼少年殺戮、妊婦殺等々、ここで要約することも不必要と思はれるが、せまい島国というかたい枠の中で同胞戦争をくりかえした日本では見られない地獄図絵である。同種相たたかう日本では民族、種族絶滅思想を欠いているので、神仏混淆という曖昧模糊とした思想実行で、ナアナア主義の日本では激裂さの程度が違う。ドイツ農民戦争に於けるこの残酷さは、それが階級戦争であったことから結果している。父子相伝の地位財産を破壊しよう、死守しようという戦いは、特に守る側が将来の暗黒を戦慄を以て想起するときは果てしない残虐性を免がれない。

### ドイツ農民戦争の史的意義

そしてドイツ農民戦争はこの中に、次世代への強力な伝達をひめていた。ドイツ農民戦争が単なる偶発的失敗であったと位置づける従来の観点は果てしない誤謬である。そこには近代へ橋渡しされる近代資本主義とこれを包含擁護する共和政の思想がはぐくまれ開陳されている。それと共に貴族諸侯の没落単純再編成と近代ナシヨナリズムに基づくエムペラー思想の確立への道が示されている。即ち近くはフランス革命に象徴具体化される世界的変革である。王、貴族、僧侶、平民に単純化される国家、社会、経済的組織の確立とその運用である。フランス革命ではアンシャン・



レジーム (Ancien Régime) と呼ばれ、当時ではヌーボー・レジーム (nouveau régime) と呼ばれるべき国家社会経済体制確立への道である。これが行きつく先は、一八六〇年代(七一年まで)に達成される、米日独伊近代国家体制である。ここまですれば近代文明統一ナショナリズム国家の併存が、世界再分割を企てる方向に梶をとり違えて二度の破滅的世界大戦争を引き出すストーリーは我々の同時代史となる。

一、かく右述の分析からしてドイツ農民戦争は歴史の偶発事では決してなく、前代を引き受け、これを次代に引きつぐ重要で激裂で悲惨な一時期を画するものであったことを決して忘るべきではない。

#### ドイツ農民戦争の共和思想・共産思想

ドイツ農民戦争はその中にブルジョア共和制をはらむ思想行動をもっていたが、それと共に神の国に於て実現すべき共産主義思想のアイデアと実行を含んでいた。ドイツ農民戦争はブルジョア資本主義共和制の思想行動と共産主義思想行動を二つ乍ら併せもつ、…これを併存というか、混在というか、…行動であった。それは本文の中に示されているのであるが、あえてその一、二をあげて重複検証をすると、

まず最初にはられる農民要求は一五二五年三月の「全農民階級と農奴の基本的正義の主たる條款」と呼ぶ前文と一ニヶ條のそれであったが、前出の如く(法学論集四五号(一九九九年一月)、「朝鮮中の抗日と大日本帝国の互解」(七)参照)農民の要求を聖書の各條項に基づいたそれとして提出し、一割税の廃止、貧者の税金の廃止、農奴課税の廃止、神に仕える者としてすべてそれに施す如く他人に施せ、という主張や要求をかかげ、財産の私的所有否定の共産主義的なその性質を色濃くもっていた。それは農民要求の上にこれと共闘する都市の商人達等の間から「法の

前の平等、行政改革、皇帝を中心とする国家統一、全国的貨幣の鑄造、全国的規模による司法権の組織化、といったブルジョアデモクラシー的要求も提出されていた。こうして農民戦争のイデオロギーはブルジョア・デモクラシー的要求（主として都市）と共産主義的要求（主として農村）の明白な混在を示しているのである。

かくしてここでこの二つの革命思潮を同時代人であるマルクス（Karl Marx）が整理する必要を感じ、ここに「共產党宣言」（Communist Manifest）の中でふれそれが革命二段階論に発展して展開された（二段階革命論については北島平一朗著作集第二巻「ファッシズムの理論と実際」の中のその項で比較的長く一応の説明を行っている）、それを是非参照されたい）。しかしここでは、それが後にソビエト・ロシアに於て、ケレンスキー（A. F. Kerensky）革命とレーニン革命がマルクスの予想の如くあらはれてそれがボルシエビキ革命の成就となったことのみのおぼろげにのみとどめる。

ドイツ農民戦争に於て尚あらはれた二つの革命的思潮は次の如くである。それはトーマス・ミュンツァー、プヘイファー、ゲイズミール等といった指導者の農民戦争牽引の綱領や宣言の中にあらはれた。その中でも事物の共産をといた明確な宣言は次の様にのべた。

- ① 自由と平等が支配する。
  - ② プリンセスや大公達は新らしき福音になじまない。従って彼らは覆滅されねばならぬ。庶民は福音を信奉し、従って彼らは尊重される。
  - ③ 神の国の市民とならぬ者は追放され、また殺さねばならぬ。
- 内なる光の目覚めをさまたげるものこそはこの世の富である。従って神の国に於ては、私有の富は存在してはな

らぬ。あらゆるものは共同で所有されねばならない。

まことに明確な共産をのべている。こういった思潮も農民戦争で力強く主張されていた。また次の様な思想も開陳された。それは、眞の神と人々を迫害する者達の廃滅。偶像、カソリックの聖さん式、同聖廟の廃棄。各商品の適正価格、高利貸し、貨幣の劣質化の処罰等と共に、各税、各レンタル料は廃される。一割税は徴収されるが、それは改革教会と貧民の為にのみ費消される。鉱山の全国共同所有。道路、航路、橋、河川は公けに管理され、それらに外敵防御施策がほどこされる、等。

これらはどれがブルジョア民主主義的主張であり、どれが共産主義思潮であるかを線を引いて絶対明確に規定することも困難であろうが、ここでのべたいことはこういった農民戦争の指導的宣言は概ね共産思想に基いたもので、ここに農民戦争のイデオロギーをみ、それが目指した明日の社会、国家の姿があるということである。ドイツ農民戦争は、従つて共産思想にみちびかれた一大決起であり、それが、よし悪し、成敗は別にして共産党宣言が出現する世の風潮の一翼を荒々しくになったものであったということである。

さてこうして拙稿もいよいよ最後の段階としてドイツ農民戦争の思潮が一向一揆のイデオロギーと如何にツロクし、如何に相牽引し、関係するものであるかの検証にすすむ次第となる。

## REFERENCE BOOKS

- 説
- (1) Agrarian Problems in the Sixteenth Century and After, Brice Kerridge, George Allen and Unwin Ltd, 1969.
  - (2) The Peasantry of Europe, Werner Rosemer, transl. by T. M. Barker, Blackwell, 1993.
  - (3) The Peasants War in Germany, 1525-1526, E. Belfort Bax, Russell and Russell, 1899.
  - (4) Lordship, Kingship and Empire, The Idea of Monarchy 1400-1525, J. H. Burns, Clarendon Press Oxford, 1992.
  - (5) The Grand Failure, The Birth and Death of Communism in the Twentieth Century, Zbigniew Brzezinski, Scribners, 1989.
  - (6) The Foundations of Early Modern Europe, 1460-1559, Eugene F. Rice, Jr, Weidenfeld and Nicolson, 1970.
  - (7) Marx & Engels, Basic Writings on Politics and Philosophy, edit. by L. S. Feuer, Doubleday, 1959.
  - (8) The Communist Manifesto, Karl Marx and Friedrich Engels, with an introduction by A. J. P. Taylor, Penguin Classics, 1967.
  - (9) The Outline of History, H. G. Wells, Garden City Publishing Co., inc., 1920-1929, 24 reprinted.
  - (10) The Expanding World, 1492-1775, The Hutchinson Chronology of World History, vol. II, Neville Williams, Helicon, 1999.
  - (11) フリードリッヒ・エンゲルス、ドイツ農民戦争、一八五〇年七月二日、伊藤新一、土屋保男訳
  - (12) 「宗教改革と日本農民戦争」、稲村隆一、お茶の水書房、昭和三〇年改訂 第一版
  - (13) 世界の大思想、3、ルター、「キリスト者の自由」、徳沢得二訳、河出書房、昭和四二年九月 再版発行
  - (14) 岩波講座、「日本歴史8、中世(4)」、一九六七
  - (15) 「講座日本歴史、4、中世2」、歴史学研究会、日本史研究会編、第八刷、一九八九
  - (16) 「一向一揆の研究」、笠原一男、山川出版社、昭和六二年、第七刷発行
  - (17) 「一向一揆の研究」、井上鋭夫、吉川弘文館、昭和六三年、第六刷発行
  - (18) 「日本宗教総覧」、新人物往来社、平成五年
- 論